モンテーニュの『エセー』を読む　（その２）

藤原　道夫

モンテーニュは書く「判断力は、どのような主題にでも通用する道具であって、どこにでも入りこんでいく。したがって、今行っているこの判断力の試みにおいても、わたしは、あらゆる種類の機会を用いるようにしている」。この判断力の試みこそが『エセー』の企てだという。それが冒頭ではなく、第一巻 50 章「デモクリトスとヘラクレイトス」に書かれている。ここで初めてエセーの種明かしをするとは、全体の構成が自在だ。

モンテーニュの試みはすぐにイギリス人に受け継がれ、『随想録』（F. ベーコン、1597）が生まれる。後に傑作とされる『エリア随筆』（C. ラム、1823）が世に出て、イギリスで“心情ゆるやかでウイットのある自由な表現法”としてエッセイ・随筆というジャンルが確立された。これが世界中に拡がり、当然日本にも伝わった。とはいえ『エセー』の 550 年以上前に『枕草子』が出ており、『徒然草』は凡そ 250 年前の著書だ。西洋よりずっと前に日本ではエッセイが誕生していた。近代にも優れた随筆家が出ている。

ここで言葉について。エセーの原語は essais、その動詞形 essayer は試してみること。モンテーニュは平易な文体を駆使して思っていることを試し書きするように綴り、まとめた本のタイトルを『エセー』としたのだろう。

英語は essay で①随筆　②試み　と辞書に載っている。同じ語源の assay は検証する、検定すること。その意味は現在のエッセイに持ち越されていないように思う。

少しはましなエッセイを書きたいと思いながら、手本になるような著書はほとんど読んでいない。今だに『エセー』に惹かれる。「おまえの人生がどこで終わろうと、それで全部なのだ。人生の有用性とはその長さにではなく、使い方にある。長く生きても少しだけしか生きなかった者もいる」とさりげなく書く。セネカの言「人生はよく生きれば十分に長い」を自己流にアレンジしたのだろう。今こそ『エセー』を読んでおこう、『エリア随筆』も日本人の著書も後回しにして。